

女子部高等科2年 家庭科

「女子部をよくするデザイン」

西上ありさ 寺尾恵理子

2018年4月から女子部設立100周年に向けたプロジェクトが始動した。この授業では、教室の中で人生がどれくらいの長さがあるのかを知るところからはじめ、最終的には街へ出て、社会の課題にチャレンジし、その成果を発表するところまで取り組んだ。授業の特徴としては、チラシや冊子等のグラフィックデザイン、情報発信に欠かせないウェブデザイン、人とのつながりをつくるコミュニティデザイン、よりよい未来をつくるソーシャルデザイン等、あらゆるデザインを取り入れた。同時に各回の授業は、疑似体験やゲームを通じて生徒たちに問いかけながら、楽しさの中に学びがあふれるように授業のあり方を模索した。

I. はじめに

震災やウィルスなど、前例のない課題にチャレンジしなければならぬ時代となった。生徒たちが社会で活躍するためには、課題を解決する方法が3つあることを知り、これらを状況に合わせて使い分けられるようにしたいと考えた。1つ目は経済的に解決する（予算等をつける）方法。これは、一定のやる気を引き出すことができる。しかし儲けるために課題を捏造し、解決したフリをするケースもあり課題も残る。2つ目は、制度的に解決する（ルールをつくる）方法。人々の行動を抑制させる効果がある一方で、人々にストレスを与えてしまう。この2つの方法のどちらを使っても解決できないものは、3つ目の共感によって解決する（楽しさから共感を生み出す）方法がオススメだ。商品販売の方法として、消費のために使われることが多かったが、課題を解決する方法として使うことができる。本授業は、共感の力とデザインの力を持って、解決する方法について学ぶことを目的とした。

II. 報告会までの学習

この授業は、2018～2019年にかけて実施した。1年目は、基礎としてさまざまなインプットを試みた。1回目は、女性であれば寿命が100年になる人も少なくないため、喪失体験というカードゲームを交えて、加齢することを疑似体験した。その上で100年の人生を設計すること、人生設計に

あたっては、1ヶ月の中で変化する自分の身体のサイクルを知り、絶好調な期間を把握することからはじめた。このサイクルを把握するには、記録が欠かせないこと、記録を助けてくれるアプリがあることなども紹介した。その上で学んだり働くためのスケジュールを立て、能力の向上と経験を積む必要性を示した。次に働き方には、雇われて働く方法と起業する方法があることも学ぶ。いまは存在しない仕事がかんたん出てくる時代でもあることを伝える。日本企業の平均寿命は23年程度であり、1つの企業で一生涯もつづけることも難しい時代である。女性が賢く生きるためには、人生設計すること、学び続けること、多様な人間関係を築くことが欠かせないと紹介。学びを最大化するために周囲と学んだことをおしゃべりして共有することが何よりも大切である。

100年の人生を生きる時代へ

- ・第1の人生 生まれてから教育機関を卒業期間(20年)
- ・第2の人生 生産的な活動ができる期間(40年)
- ・第3の人生 余生から最期まで(30～40年)



2回目は、授業が眠くなると聞いたので、眠くならない方法を模索。やる気度をチェックし、ゲ

ームを導入。肯定的なコミュニケーションが未来のキャリアをつくることを体験。チャンスを探る方法についても紹介し、基礎的なインプットは十分にしたので、夏休みの宿題を出す。「マイパブリック活動」として、自らが楽しいと思える活動とまちを元気にする活動を考え、実施してもらう。これは、企画を立てる方法を学ぶことでもある。やりたいこと、できること、社会が求めることが重なる点により企画がある。できた企画を実現するには、参加の階段を登らねばならない。参加は、聞く、知る、考えるというステップがあり、その先に加わる、企画を支える、企画を運営するという参画のステップがある。参加者がゼロだったり少ない場合は、聞く、知る、考えるのどこかで躓いている可能性がある。またチラシ等を作成する場合があるため、デザインについても学ぶ。企画をよくするテーマカラー設定、写真やイラストなどのキービジュアル設定、デザインの基本となるレイアウト、写真撮影のコツ、文章のコツについても学んだ。企画を運営するチームには、発展には段階があり、結成期は遠慮や気遣い、混乱期は意見の対立等でモチベーション低下、その後秩序期があり信頼関係とモチベーションが高まり、達成期は個々に意思決定ができチームワークによってよりよい成果が発揮されることを伝えた。マイパブリック企画シートを記入し、夏休みへ。

3回目は、マイパブリック活動をやってみてどうだったかを発表し、ふりかえりを実施。企画を考えているうちに夏休みが終わってしまった生徒、企画で思い描いたことと実際には差があることを実感した生徒など、それぞれにチャレンジした夏休みであった。先進事例として、楽しいことから企画を考え、起業につながった女性の取り組みを紹介。その上で、100回生としてやってみたいことを生徒たちに問う。「できること」「したいこと」の付箋がたくさん出され、そこからパーティから葬儀までの集いの場を手掛ける株式会社、理念や事業内容を導き出した。特に印象的なのは、できることとして書かれた付箋の言葉に幅の広さを感じ、まだまだ広げる余地があることを予感させた。

4回目以降は、仮想の会社として「株式会社100回生」の会社概要をデザインした。パソコンやタ

ブレットを使い、4~6ページ程度の冊子を作成した。またこれからの時代に欠かせない情報発信についても学び、ホームページ、ブログ、メールマガジン、ツイッター、フェイスブック、手紙、チラシ、ポスター、冊子による発信効果と課題についても学んだ。

Ⅲ. 報告会への準備

2年目は、基礎を土台に、「これからの世の中に必要とされる能力とは何か」を話し合う。①自己が満足する能力(楽しい、納得している)、②ねばり強さ(あきらめない、批判に負けない)、③思いやり(自分を大切にすること)、④コミュニケーション能力(対話、伝える、話す、気づく、きく)の4つにまとまった。生徒たちが必要だと思う能力を伸ばしていくために、探求したいテーマを検討してもらう。その結果、時間の使い方(ゆっくりする時間の必要性)、食(フードロス)、男女差(格差)に取り組むこととなる。全9回の授業回数から逆算して活動計画を立てる。

2回目は、時間の使い方を調査するアンケートを設計、残食量や空腹となるタイミング等を調査する世論調査を設計、男女差を調査するアンケートを設計し、調査と結果を単純集計して持参。集計ミスから調査票の山の前で頭を抱えながらも、協力して再集計する姿や鋭い分析結果を持参するチームまであり、誰もがリーダーになれるチームワークを感じた。このあたりから、生徒との連絡調整や質問等を日常的に受け付けるため、SNSを活用してLINEグループを作成した。生徒全員がLINEを使えるわけではないため、各家族から2~3人程度連絡係を決めて参加してもらう。その結果、アンケート調査票などを詰める作業や文章の添削は、LINEを活用して実施することができた。

3回目と4回目は、時間チーム、食チーム、男女差チームがそれぞれにアイデアを出し合い、企画を練る時間とした。チーム別に進捗を確認しながら、チーム別に相談に乗り、参考事例や書籍、映像資料等を紹介している。また実践に向けて、必要な備品等があれば、予算書を作成し、購入した。ここでもLINEでの授業時間以外にも連絡調整できるやりとりが活躍した。

5回目は、六本木で実施。男女差チームの社会実験とプレゼンの制作のためのインプットとして、会員制図書館である文喫で実習する。生徒の服装は、TPOを考慮する必要があるため生徒たち自身が決めた。社会実験の様子については、後述する。文喫という会員制の図書館は、キュレーターによって、新書から古書までを扱い、図版の豊富な書籍が多い。生徒たちが、情報収集するにはもってこいの場所である。寒い屋外から暖かな図書スペースへ移動したにも関わらず、眠そうな生徒は一人もいない。次から次へと書籍を収集し、中身をチェックし、プレゼンに活かせるものがないかを探した。本を夢中になって読む姿から学びがあふれていた。

6回目はリハーサルと7回目の前日準備は、プレゼンする姿を映像で記録し、プレゼンター自身に見てもらった。自分が話す姿を見るのは、恥ずかしいことだが、客観視することで改善点がわかる。話すスピード、身振り手振り、スライドとのテンポのあわせ方、間のとりかたなど、修正作業を10回程度繰り返した。これにより、堂々としたプレゼンテーションができるようになる。また、発表に余裕が出てくるため、観客を笑わせるポイントを検討してもらい、楽しい発表となるようにさらなるブラッシュアップに努めた。

IV. 報告の内容

発表本番は、以下のように発表している。食チームは、美味しいという気持ちがフードロスにつながることを発見し、女子部の年間残食量が1.7トンにのぼることを明らかにした。1日のうちでお腹が減るのは3時間目(昼食前)であることもアンケートから把握し、間食として食べたいものはおにぎりであることも明らかにした。その結果、残食の米を塩気のあるおやつにリメイクし、試食とアンケートを実施して、手応えを得た。

時間チームは、幸せな毎日のためにどんな時間の使い方ができるのかを調査した。生徒約70%は時間が足りず困っている、一方で満足している生徒が12%いた。この満足している生徒を事例として無駄な時間を削減する方法、予定を立てるなどして時間を有効活用する方法、何もしない時間も

大切だと考えるなどして意識を変える方法があるとわかった。これらを理想として、理想の生活像をつくり、実践してみた。理想の生活はやりたいことができる一方で疲れることもわかった。これはチームが目指していた幸せな毎日ではない。自分の体力と理想の生活をあわせて、満足感がうまれるバランスを見つけることが大切であると結論づけた。幸せな生活を考えるための記録シートを作成し、ほかの生徒にも自分なりのバランスをみつける手助けをしたいと提言した。

男女差チームは、暮らしやすい社会をつくるために男女の違いについて調査、男女教師あわせて163人に調査し、学園内の男女差がどこにあるのか調べた。結果、授業のやり方に違いがあるとわかった。女子は座学が多く、男子は座学ではない授業が多いこと、逆に女子の授業が羨ましいと思っている男子がいること等もわかった。性別にとらわれず、みんなが受けたくなる授業は、課外授業であると考え、まちへ出て、男性を支援するプロジェクトに取り組むこととした。日本の社会課題は、少子化でも高齢化でもない、サラリーマンに元気がないことが原因として、元気を出す方法を検討した。元気になるためには身だしなみが整っていることが重要で、ヘアスタイルを整えるための支援を実施した。元気のないサラリーマンは六本木にいと想定し、六本木で支援活動を展開した。しかし六本木のサラリーマンはヘアスタイルがキマっており、支援を体験するために立ち止まってくれる人もほとんどいなかった。1名であったが支援を受けた男性は、ヘアスタイルを整え清々しい顔で去っていった。この結果から行動力、対話力があるとわかり、自信につながった。次回は、場所を変えて、新橋で支援活動をするのがいだろうと考えている。社会と接する授業に参加し、活動の幅を広げたいと発表した。

どのチームも堂々たる発表をただけでなく、笑いをしっかりとっていた点を大いに評価したい。

V. 報告会を終えて

報告会をふりかえるため、この授業で学んだことを小さな冊子にまとめてもらった。そこには、この授業で学んだことが、自分なりの言葉で書か

れていた。また冊子は表紙からしっかりデザインされており、次に同じ授業を受けるかもしれない後輩たちへの手引書となるように作成されていた。最後におつかれさま会として、ティーパーティを実施した。キャンドルを使って、マシュマロを焼き、クッキーでサンドして食べるデザートだ。火を見ながら、楽しかったことを回想し、次のアイデアを話し合う。その様子から、楽しさの中に学びがあふれている状態こそが、生活即教育なのではないかと感じた。



写真：スモアパーティの様子

VI. 終わりに

日本の社会課題は、長い時間かけて経済的かつ制度的に解決されてきた。しかしどちらの方法でも解決できない課題が、社会や学園の中に残っているのではないだろうか。この授業を通じて、「共感の力」は、信じて待つことで醸成され、程よい距離で励ますことによって、どんな状況にあっても学ぶことをやめない力が湧いてくるものだとわかった。本授業から学んだことを今後も伝える努力をし続けたい。

私は、各回の授業で生徒たちに会うのが楽しみで仕方なかった。なぜなら、どの生徒も生まれつ

き持っている能力を活かしながら、学園生活で培った生きる力がみなぎる意見を言ってくれるからだ。こういう生徒を100年連続で世の中に送り出してきた教育現場に関わることができたことを嬉しく思っている。ご協力いただいた、教師のみなさまの日々のたゆまぬ努力に心から感謝申し上げたい。

VII. 参考文献

「Celebrate Everything!」 Darcy Miller

William Morrow (2016/10/25)

※引用箇所はありませんが、授業のインスピレーションを得たので書いておきます